

序文

ジャクリーヌ・ベルント

本巻は、2012年6月に神戸大学と京都国際マンガミュージアムで開催した学術会議と、その直後に京都精華大学で開催した特別シンポジウムを選択的にまとめた論集である。全13章のうちの7章は、当時の研究報告をもとに執筆しているが、台湾や東南アジア、西欧におけるマンガ／漫画¹についての新しい章も加わっている。それはこの論集が2012年の会議のテーマであった「サブカルチャー」、あるいはそれに沿った「日本サブカルチャー」としてのマンガではなく、「マンガ研究」に重点を置いているからである。

『《マンガ・ワールドズ》——サブカルチャー、日本、ジャパノロジー』と題した、国際マンガ研究センターにとって第4回目の国際学術会議は、神戸大学人文学研究科の「日本サブカルチャー研究会」との共催の形を取り、当センターの予算や国際交流基金の支援に加え日本学術振興会の助成金を得て開催された。神戸大学側にとっては、国際共同に基づく日本研究

1 本巻では章によって「マンガ」とほぼ同義で「漫画」を遣う。それは、「日本マンガ」と「韓国マンファ」などの国民文化的な属性を避けて表現メディアや若者文化としての、つまり総称としての共通点を意識させるためであり、カタカナ表記で識別しにくい manhua (マンホア) と manhwa (マンファ) をめぐる誤解を免れるためでもある。

推進事業「日本サブカルチャー研究の世界的展開」²の一環をなしていたため、厳密な意味での「マンガ研究」ではなく、むしろ「日本研究」、そして、近年、日本でよく耳にする「サブカルチャー」という言説との関係から、広義の「マンガ文化」を考察することがその趣旨であった。この「マンガ文化」に含まれるものは、コンテンツ・ツーリズムおよびオタクや腐女子の活動から、海外におけるマンガ関係の文化および市場に至るまでと範囲が広い。しかし、神戸大学副学長がその開会スピーチにおいて「マンガというサブカルチャー」を当然であるかのように「コンテンツ産業」と同一視し、その2日後、ゲストスピーカーの三原龍太郎（経産省）も、マンガのメディア的特質に固執せず、「コンテンツとしてのサブカルチャー」を発表テーマとしていた。

ところが、マンガ研究にとっては、マンガは商業的コンテンツに限られたものではない。また、マンガは全面的な文化の中の「下位」的なものでもなく、「主流的サブカルチャー」³と呼ばれるほど普及しているのである。1990年代末以降、「サブカルチャー」という語は日本においてどうせ「文化的地位において劣っている」や「常軌を逸している」といった元々の意味を奪われた上、公論において「ポピュラーカルチャー」という名称に取り替えられた。

社会学の視点からは、「サブカルチャー」の名のもとで、マンガの具体的な作品やそのメディア論・知覚論より、マンガをめぐる言説や、マンガの消費者・使用者についての研究を進める方が有意義であろう。近年、特にオタクと腐女子が注目を集めている。ただし、このオタクと腐女子はマンガとの関係があったとしても、それが必ずしも必然的な関係ではない。それ故に、オタク研究・腐女子研究と、マンガ研究とは部分的にしか重なり合わないことを見逃してはならない。

2 研究代表は神戸大学文学部の油井清光であったが、研究分担者に、本論集に翻訳者として献身的に協力してくれた雑賀忠宏の他に神戸大学の前川修と速水奈名子、また編者も含まれていた。http://www.japan-subculture.com/top.html(最終確認 2014年3月1日)。

3 伊藤剛「マンガのグローバリゼーション」、『思想地図』vol.1、NHK books、2008、121-150頁

さらに、マンガを「日本文化」として捉えるのも、マンガ研究の視点においてますます複雑になりつつある。周知の通り、日本マンガの越境やその海外コミックスとの接触・交渉によって、「日本」に特定されない、国民文化の基準で把握できないようなものが生まれてきている。そのため、一枚岩としての、不変の文化同士が会うことを想定する従来の「影響論」や「模倣論」、「比較文化論」は機能しなくなる。説得力をもってそれらを再検討するのは本巻の第4章——フェブリアニ・シホンビングの「コミックを『政治化』する『影響』論と『様式』論——インドネシアのコミック言説について」——および第5章——トジラカーン・マシマの「タイコミックスの歴史——多様なマンガ文化の間で形成された表現」——といった論文である。この2つの章は、いまだにあまり知られていないインドネシアやタイの各マンガ/コミックス文化を紹介するだけでなく、マンガ研究に欠かせない方法論をも確認させてくれる。

「マンガ研究」が「日本サブカルチャー」論と結びつきにくいという事実を背景に、会議のテーマとして《マンガ・ワールドズ》を選んだが、この題名から引き出される主に2つの意味についての問題を追究してみた。一つは、マンガ（やアニメ）が提示し、ファン、そして企業が展開していく文字通りの虚構的「世界」である。もう一つは、現代文化のあり方を「マンガチック」な状態に喩えることである。英語圏ではマンガではなくゲームを手がかりに同類の、いわゆるゲーム化論^{ゲームフィケーション}が登場しているが、ユーザーの参加を招く仕組みや感性的・情動的面白さの重視、協働する創造と同時に商業主義の肯定などを含み、写実性よりファンタジーを、メッセージより効果を優先することを特徴としている。ゲームであれマンガであれ、どれを参照するとしても、日本とそのマンガに限らない状況が問題視されるのである。

2012年の国際会議では、雑賀忠宏（神戸大学）による日本での「サブカルチャー」概念の分析をはじめ、イアン・コンドリー（マサチューセッツ工科大学）のアニメ創造論と甘添發（シンガポール国立大学）のオタク言説論、フユキ・クラサワ（トロント・ヨーク大学）のアイコン論を通して、さまざまな側面から理論的枠組みが提示されたが、クレイグ・ノリス（タ

スマニア大学)と原一樹(神戸夙川学院大学)によるコンテンツ・ツーリズム論のように具体的なケースも紹介された。それらに加え、前川修(神戸大学)は「Jホラー」というジャンルについて美学的・映像論的位置づけを試みた。

さらに、「日本サブカルチャー論」と日本研究^{ジャパノロジー}についての問題提起が行われた。森川嘉一郎(明治大学)による「オタク文化と『日本』」という発表は、マンガミュージアムで開催された「絵師100人展」と関連づけられたので、もっとも記憶に残ったのではないだろうか。『国際マンガ研究』3巻に刺激的ヤオイ論を寄稿してくれた金孝眞(高麗大)は韓国を例に日本研究と漫画研究との複雑な関係を究明し、三宅俊夫(ヴェネツィア大学)は、日本研究自体を「サブカルチャー」の一種として捉え、その日本サブカルチャー論への傾斜を「上からの周辺化・下からの周辺化」という観点から解析した。そして、ファム・ホアン・フン(ハノイ国立大学)は、日本研究が『ドラえもん』の翻訳版発行(1992年)とほぼ同時にベトナムにおいて確立した事実を挙げ、近年のマンガ・ブームに如何に対応していくのかについて発表した。当時の報告の改訂版であるこの第7章は、若者文化における日本マンガに焦点を当て、若者の創造と国家による教育の両面にこだわっている。それとは対照的に、グエン・ホン・フックの第6章は、出版史の側面からベトナムでのコミックス文化を辿り、そして、日本マンガを吸収しながら、自らのフュージョン・スタイルを展開してきた作家フォンを紹介している。同様に、個人が見えない問題としての「マンガ文化」でなく、具体的な作家やその表現に注目するのが第2章と第9章である。前者において実技系の筆者が台湾女性マンガ家AKRUの制作に着目するが、後者において、女性マンガのジェンダー論に専念する研究者は、部分的に日本マンガを連想させるが日本マンガ編集者に認めにくいほど独特な表現と物語を生み出してきたシンガポールの作家FScを取り上げている。

会議ではその他に、ジャン＝マリー・ブイッサー(パリ政治学院)と、マルコ・ペリテッリに代表される「マンガ・ネットワーク」の意識調査についての報告があった。ペリテッリが第10章でまとめているこの調査は

西欧のマンガ読者が抱く「日本」のイメージを追求している。東アジア諸国における類似の調査は神戸大学が本研究推進事業の一環として実施したが、会議ではアルバロ・エルナンデス（神戸大学）がその報告を行った。

ルース・オリビア・ドミンゲス・プリエト（メキシコ国立歴史人類学院）は自国でのヤオイ文化を例に、ホモフォビックな社会におけるマンガの可能性を主張した。その主張は本巻の第3章——周典芳「台湾の男性同性愛者によるBL漫画の批判的受容」——および第12章——ジェシカ・パウエンス＝杉本「フランスのマンガ市場と腐女子」——と基本的に重なり合い、近年、特にヤオイ・マンガが発揮する文化横断的力を意識させる。興味深いことに、マンガではなくビジュアル系のJポップ音楽がフィリピンにおいてヤオイ（あるいはBL：ボーイズラブ）文化を開拓した。歴史学者カール・イエアン・ウイ・チェン・チュア（アテネオ・デ・マニラ大学）はそれを会議で指摘したが、本巻のためにBL活動家兼研究者であるクリスティン・ミシェル・サントス（ウーロンゴン大学）と手を組み、メディア史・業界史の側面からフィリピン・コミックスの全体像とそれにおける日本マンガの役割を描いている。

会議の時に、フランスにおける日本マンガについて2つの発表があった。豊永真美（日本貿易振興機構/JETRO）は近年のマンガ市場とそれを支える出版社を紹介し、猪俣紀子（国際マンガ研究センター）は、谷口ジローと丸尾末広などの、マンガの主流から外れるとみなされている「サブカルチャー」的な作家の作品がフランスで例外的に普及していることについて言及し、また、ファンと学者によるマンガ論を分析した。その結果、日本研究に携わる学者こそが、日本マンガをめぐるオリエンタリズムを促進しているかのような印象を受けた。猪俣による本巻の第11章は、フランスにおけるマンガ市場の具体的なデータを提示すると同時に、フランスでのマンガ論者の異国趣味的なスタンスを問うている。フランスの状況については日本語で知る機会が増えてきたのに対し、スペインのマンガ事情はまだほとんど未知である。そこで第13章——ホゼ＝アンドレス・サンティアゴ・イグレズィアス『『イベロ・マンガ』——スペインでの主流からニッチとしての女性マンガとガフオタクまで』——で概説されるスペインに

おけるマンガ文化の全体像や、えすとえむの「Golondrina」の受容に至るまでの言及が大変有り難い。しかし、西欧についての空白を埋めることになったとしても、東欧のマンガ／コミックス文化論は相変わらず報告が少ないことを認めざるを得ない。

上記の各論文の要約から明らかのように、本巻は会議録ではなく、マンガ研究と関連した論文のみを集めている。具体的なメディアの特性にこだわらず「サブカルチャー」を中心に据える論集も確かに求められているが、その企画・編集は社会学者の油井清光と王向華（香港大学）にお任せしたい。本巻としては、マンガ研究とは直接関係のない報告を掲載するより⁴、会議の翌日に開催した特別シンポジウム「東南アジアのマンガ」での発表を取り入れた方が有意義に思われた。日本マンガのグローバル化論は、主に欧米や東アジアとの比較から行われてきたが、近年、東南アジアもマンガを媒体とする異文化交流の場として注目を浴びつつある。第4回国際学術会議をきっかけに来日した若手研究者と、日本留学中の博士課程の大学院生による問題提起は、シンポジウムにおいて活発なディスカッションを引き起こしたが、その延長線上で本巻に所収するフィリピンとインドネシア、タイ、ベトナムについての論文や研究ノートがまとめられた。地元のコミックスをめぐる言説と日本マンガの受容、表現としてのマンガと媒体としてのマンガ、出版文化とファンカルチャー、さらに日本マンガがもたらす（特に女性的）「ジャンル」の役割を追究しながら、日本を含む広義のマンガ文化論をこれから如何に展開していくかを検討させてくれる。

本論集には「東南アジア」の部はあるが、「東アジア」の部はない。中華人民共和国において学術的マンガ研究を行っている機関や研究者がまだ見つかっていないことがその最も大きな理由に挙げられるが、『国際マンガ研究』3巻として2013年に「日韓漫画研究」を発行したのがもう一つの理由である。韓国に引き続き本論集の第1部としては台湾に焦点を当てているが、李衣雲による第1章——「台湾の漫画審査制度と日本漫画の

4 例えば、政治学者ニッシム・オトマズギン（エルサレム・ヘブライ大学）による『マンガ嫌韓流』の思想内容論もマンガ研究外に留まっていたが、ファムのベトナム若者文化論と異なり、他文化についての新しい情報も含んでいなかった。

アンダーグラウンド的展開」——はその優れたイントロダクションであると同時に、行政と市場との関係について新たに考えさせる問題提起でもある。

最後ではあるが、2012年の第4回国際学術会議を可能にしてくれた方々、さらに本論集の寄稿者と編集協力者、翻訳者、特にジェシカ・パウエンス＝杉本、雑賀忠宏、佐和那々緒、工藤陽子、石川優、西原麻里、小林翔と小川剛に対してお礼を申し上げます。貴重な情報と方法論的刺激を数多く収めた本論集が、マンガ研究の幅を広げることを期待したい。

ジャクリーヌ・ベルント (Prof. Jaqueline BERNDT, PhD) 1963年ドイツ生まれ / 1991年に博士号取得後来日、立命館大学と横浜国立大学の専任教員を経て、2009年度以来京都精華大学マンガ学部教授へ / メディア芸術学および比較文化論の視点からマンガ研究に携わる / 2009年以来毎年、国際マンガ研究センターのために学術会議を企画し、それに基づいた論集(『国際マンガ研究』1～3巻)を日本語や英語で編集する / その他の出版物: 『マン美研』(編共著、醍醐書房 2002)、『美術フォーラム 21』24号(特集「漫画とマンガ、そして芸術」、2011)、『Manga's Cultural Crossroads』(共編著、Routledge, 2013)など。